未刊國文古籍叢釋大系

第十三卷

吉澤義則　編

未刊國文古註釋大系

第十三卷

清文堂

未刊国文古註釈大系（全十八巻）第十三巻

昭和十三年六月二十日　初版発行
昭和四十三年十月五日　複刻版発行

編纂者　吉澤義則
発行者　前田勝雄

製版者　京都市下京区柳馬場四条通下
光綾写真製版株式会社
能登英夫

印刷者　京都市南区東九条南石田町一
朝陽堂印刷株式会社
髙橋清二

製本者　大阪市天王寺区勝山通一ノ一〇
倉橋製本株式会社
倉橋重男

発行所　大阪市南区二ッ井戸町十五
清文堂出版株式会社
振替　大阪六二三八
電話(〇一一)六二六五(代)
郵便番号　五四二

未刊國文古註釋大系

第十三册　目次

土佐日記講註　池田正式著　一册　一

蜻蛉日記紀行解　田中大秀著　一册　四

かけろふの日記解環補遺　田中大秀著　十八册　一〇三

紫式部日記解　足立稻直原撰　田中大秀等補訂　四册　二六三

枕草紙存疑　岡本保孝著　一册　四〇一

土佐日記講註開題

本書は池田正式の講述である。

本書の傳寫本である小川壽一氏所藏本の奥書によれば慶安元年秋に催された正式の土佐日記の講筵に列した人がその九月四日に書寫したものである。

本書は土佐日記の最古の註釋書である。岸本由豆流の土佐日記考證の卷頭に附せられた「諸抄論」の最初に、

「土佐日記聞書」は、著者の名をしらず。されど、おしはかりに、元和・寛永のころの人のわざとおぼし。こは、なべて世に見ゆるものにもあらず。きゝもおよばざりしかど、ちかきころ、一本を得て見るに、いとまだしき說どもすくなからねど、また、すてがたきもあるべし。この書は、世にもしられざるものから、この日記の、註釋のはじめとこそはいはめ。

と記されてゐる「土佐日記聞書」は、この正式の講註のことであらうと推察される。それは、土佐日記考證の註釋に引用された「聞書云」の箇所が全く正式の講註に一致するからである。(國文學研究第一輯に小川壽一氏の所說あり。)

池田正式は通稱を十郎右衞門(俳諧塵塚による)と呼ぶ。初めは貞室門であつたが、後貞德門となつた。大和國郡山城主本多內記政勝の臣である。正保三年一月、重賴の毛吹草に對して「古保里山」一卷を著はしてこれを難じてゐる。この正式の著に就いては滑稽太平記等にその顚末を傳へてゐるが眞僞の程は判然しない。又、俳家奇人談にもその逸話を載せてゐる。正式の句は「毛吹草」・「古保里山」・「山の井」(季吟撰)・「玉海集」・「塵塚」等に見られ、明曆三年二月には貞德・貞室の撰になる玉海集に序をしたゝめてゐる。

正式は俳諧の外狂歌をよくして 堀川百首歌題狂歌集」を寛文十一年に出してゐる。この書には、右に平郡實柿、左に布留田造の變名を用ひてゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

土佐日記

一本の奥書云、延長八庚寅土佐の國に下りて、承平五年乙未京に下りて、左大臣殿白河殿にをはします御供に参てたる歌つかふまつれとあれは、よめる、

百種の花の影まて移つゝ音もかはらぬ白河の水

此歌、貫之か集第六にあり、庚寅乙未の間六年なれは、此日記は此時の事なるへしといへり、

をとこもすなる日記といふ物を、女もして見んとてするなり、某の年の十二月の廿日あまり一日のひの戌の時に、かとてす、そのよしいさゝかものにかきつく、

此一段序分なり、小段を分は、發端より見んとてするなりと言までを一節とし、それより已下を一節とすへし、さて本文の意は、凡そ紀行日錄なと言物は男子の眞名にかくもの也、今、貫之、土佐より京までの紀行を假名にかく事をいはんとて、男のする眞名の日錄を、女にかはりて假名にかきて見んとてするなり、眞名をは名目に男文字と言ひ、假名をは女文字と言、又此記の内を見るに、貫之妻室を携へ上るとあれは、妻にかはりて書く意もこもるへし、某の年は承平五年を指す、いさゝか物に書付とは、便ち此記の事也、

ある人あかたの四とせ五とせはてゝ、例の事ともなしをへて、解由なとゝりて、すむたちよりいてゝ、舟にのるへきところへわたる、

ある人は貫之なり、名をあらはさす、自記の筆法なるへし、縣の四とせ五とせはてゝは、田舍へ仕官せらるゝを縣といへり、或は三年、或五年、常の事なれは、四とせ五とせと言、例の事ともみなしをへてとは、前官の人後任の人へ國務をわたす時、官税公事いろ〳〵の事共を皆なし畢てと也、解由は勘解由の字義と同し、とくろよしとよむ、算用結解の事也、こゝにては算勘とゝこをりなきとの證文を、後任の人より貫之うけとるなり、今俗間に手形なと言類のことし、本文の意は、かやうの事も除

あきて、すむ館より津頭へやう〳〵出ると也、

かれこれ、しるしらすをくりす、年比よくぐしつる人々なん、わかれかたく思ひて、日しきりにとかくしつゝ、のゝしるうちに、夜ふけぬ、

思ひての下に、一本に其の字あり、是とす、彼も是も、知人も不知人も、貫之を舟付までをくる、年來貫之と一具しつる友たちは、殊更わかれかたく思なり、其日あまたの人々、しきりに何やかやいひのゝしる内に、程なく夜更るとなり、

廿二日、和泉の國までと、たいらかにねかひたつ、藤原言實、舟路なれと馬のはなむけす、かみなかしもゑひすきて、いとあやしく、しほ海のほとりにて、あされあへる、

ねかひたつは立願なり、ゑひは醉也、すきは過にあらず、逸の字をすきとよむ、逸樂にてたのしむなり、あされは戯なり、いふ心は海跡安平に和泉の國著岸までと、神明に祈願をたつ、藤原の言實と言人、海路なれと馬のはなむけをくりをする也、上中下の人々饗應の酒に醉たのしみて、海のほとりにてあやしき迄戯れ合となり、舟路なれと馬のはなむけと言ひ、しほ海のほとりにてあされ合ると言、皆誹諧體なり、あされは論語にても魚のくさりたる事也、しほ海ならはくさるましき事なるにとの誹諧也、

廿三日、山の康教といふ人あり、此人國に必しもいひつかふものにもあらす、是そたゝしきやうにて、馬の餞したる、守からにやあらん、國人の心の常として、今はと見ゆ、さんなるを心あるものは、はちすきなんきける、是は、物によりて譽にしもあらす、

いひつかうものにもあらす、山の康教はあなかち國に任官なとをして、國守の詞命にしたかひ、使令せらるゝ人にてはなしとなり、然るに貫之に餞別するは、實に正直なる人よとほむるなり、守からにやあらん、貫之自負の心なり、いふ心は、餘の任官の人にはかやうにあるましきを、貫之國守の内、善政ある故に、人もしたひ來るといはん爲也の辭なり、故に下の辭に總して、國人のく

せにて、今はと任官の人かはれは、かやうに馳走をする體は見ゆるものなる、康敎をはしめとして、心も有ものは、炎に附き冷を避る事をはちて、我に餞する、たのしみて追來るとなり、是は物によりて譽るにしもあらすとは、かやうに貫之か康敎を譽るは、餞のをくりものなとにめてゝ、譽るにはあらす、其人からを譽るそとなり、

山康敎何人と言事をしらず、土佐の國人と見へたり、

廿四日、講師、馬のはなむけしに出ませり、ありと有かにしも、童まて醉しれて、一文字をたにしらすものしか、足は十文字にふみてあそふ、

こゝの講師は講經の法師也、貫之か土佐にての祈禱の師なるへし、醉しれて醉人はをろかなるものなれは、かく言なり、杜預左氏の註に言ふところの白痴の字の心なるへし、一文字もしらぬものなれと、十文字に足をふむと言は、醉人の體を言へり、誹諧なり、

廿五日、守の館より、呼に文もてきたれり、よはれていたりて、日一日、夜一夜、とかくあそふやうにて明にけり、

この守は、貫之にかはりて京より來れる當土佐守也

廿六日、猶守の館にて、あるしのゝしりて、をのこあまたに物かつけたり、唐詩聲(カラウタ)ありていひけり、倭歌(ヤマトウタ)あるしもまろうとも、こと人も言あゑりけり、からうたは是にはかゝす、倭歌あるしの守のよめりける、

おのこあまたにを、一本に、おのこらまてにと有、是とす、あるしのゝしるあるしは、主人也、當土佐守を指す、物かつけたりは、被物なり、引出なり、唐詩、絲竹に和して歌ふものなる故に、コヱありてと言り、あるしもは主人も也、まろうともは賓客も也、則ち貫之なり、こと人は別人なり、

みやこ出て君に逢んとこしものを來し甲斐もなく別れぬる哉

當國守の歌なり、心はあきらかなり、

となんありけれは、歸前の守のよめる、

となんにて句をきるへし、下皆是にならへ、歸前(カヘリノ)守は京へ歸る前の土佐守なり、すなはち貫之なり、

白妙の浪路を遠く行かひて我ににへきは誰ならなくに

貫之歌なり、行かひは行ちかふなり、古今序にもたのしみゆきかふとあり、歌の心は當守と我と、浪路をたかひに行違ふて、行ともとゝまるもあり、さて我は國務をもよく取行て、京へのほれは、仕合のよき我也、其仕合にあやかるへき人は、別に誰ならん、そなたなるへしと言心なり、我幸を以てむかひを祝したるなり、

こと人々のも有けれと、さかしきもなかるへし、とかくいひて、前守も今も、もろともにをりて、今のあるしも前のも、手とりかはして、ゐひことにこゝろよげなることして出にけり、

さかしきもなかるへしすくれたる歌もなしとなり、をりては暇乞(イトマコヒ)に庭前なとへ下りたる心なり、又古今に、心さしふかくそめてしをりけれはと言ときは、をちつく心なれは、こゝにても、賓主相得たる體を言事にもなるへし、手取かわすもいとまこひの體也、心よけなる言とは祝言也、

廿七日、大津より浦戸をさして漕いつ、かくあるうちに、京にて生れたりしおんなこ、爰にて俄に失にしかは、此比の出たちいそきをみれと、何事もゐいはす、京へかへるに、おんなこのなきのみそ悪(ミ)こふる、有人々もゐたへす、此間に、ある人のかきて出せる歌、

此頃のいてたち、いそきよろこひも、むすめの失たる哀傷にて、よそ事になりたると也、或人々はあり人々なり、

ある人のかきて、ある人貫之妻室也、

京へと思ふも物のかなしきはかへらぬ人のあはれなりけり

京へかへるはうれしかるへきに、物のかなしきは、いかなる故そと言に、爰にて失せて、我と京へ歸らぬ人の有故そと也、妻の歌也、

またある時には、

あるものと忘れつゝ猶なき人をいつくととふそかなしかりける、

是も妻の歌也、こゝろは、なき人をなくなりたると言事を、打忘れて、ともすれは、我子はいつくにあるそと、

問なんとする事、有無をわすれたるほとの哀にしつむと也、

と云間に、鹿兒崎と言處に、守のはらから、またこと人これかれ、酒なともておひきて、磯にをりゐて、別れかたき事を言ふ、守の館の人々の中に、此來る人々そ、心あるやうにはいはれほのめく、かく別れ難くいひて、かの人々のくちあみもろもちに、此海邊にて、になひ出せる歌、

鹿兒の崎と言處へ、國安の兄弟、又餘の人々に、いつれも酒なともたせて來て、別れを惜むと也、一說に守のはらからは、則ち貫之か弟雅實と言人、今の國守の介になりて、土佐へ今度下れり、それか事也といへり、重て考へし、國守の館の人をゝくあるか中に、今こゝへおくりに來る人々を、心ある人也と世間の者もいひ譽るると也、世間の者はかりにもあらす、貫之もさ思ふと言心もこもれりくちあみは口綱なり、綱は重き物にて、あなたこなた引まはるものなり、もろもちは諸持也、より合て互に力を合する事也、其歌をよみ出すくちをもなるも、あなたこなたもち合ふて、やう〳〵に荷ひ出すなり、荷ひ出す歌とは、荷擔辛苦するやうに、沈吟斷思してよみ出す歌也、本文の心は此人々互に力をいれて、此海邊にて此歌をよみ出せると言義也、綱と言より下に、海邊と言、持言により下に擔出すと言文字の照應なるへし、

をしと思ふ人やとまるとあし鴨のうちむれてこそ我は來にけれ

惜しと思ふ、貫之のとまり給ふかと思ふゆへに、鴨の群れ飛ふことくに、各ともなひて是まて參りたるとなり、

をしと思ふと言に、鴛鴦のこゝろをこめて、下に鴨の事をいへり、鴨に芦を付る事は、芦葦の內にすむ物なるに因て也、芦鶴と言同し、

といひて有りけれは、いたくめてゝ、行人のよめりける、めてゝは愛するなり、行人貫之なり、

棹させとそこゐしられぬわたつみのふかき心を君に見る哉

わたつみは海なり、棹をさしても海底の深きはしられ、又其如くなる深情を、そなた達の餞別にてよく知りたり

と謝禮の心なり、又前歌の深意を海にたとへて、挨拶の心にもなるへし、

と云ふ間に、楫とりものゝあはれもしらて、をのれし酒を喰ひつれは、はやくゐなんとて、しほみち又風も吹ぬへしとさはけは、舟にのりなんとす、此をりに、ある人に、をりふしにつけて、からうたともにつかはしきをゐふ、また或人、にしくになれと甲斐歌なといふ、かくうたふに、船やかたの塵もちり、そら行雲もたゝよひ又とそいふなる、こよひ浦戸にとまる、藤原言實、橘の季衡(スヘヒラ)、こと人々をひきたり、

にし國なれと甲斐歌なといふ、土佐は西國なれと、東國甲斐歌なとをうたふとなり、古今東歌の部に、甲斐歌をあけて、

甲斐か根をさやにも見しけゝらなりよこほりふせるさやの中山

甲斐か根をねこし山こし吹風を人にもかもやことつてやらん

此二首を載たり、此歌をうたふなり、うとふ聲の感によりて、舟屋形のちりもちり、そら行雲までもたゝようとなり、是は虞公奏青ヵ故事を用たり、事文類聚に七略を引て、言善歌者有虞公發聲動梁上塵とあり、又列子に薛譚學謳於秦青未窮青之枝而辭歸青餞於郊乃撫節悲歌聲振林木響遏行雲譚乃謝求反不敢言歸といへり、

廿八日、浦戸よりこき出、大湊を追ふ、此間に、早クノ守の子山口の千峯、酒好き物とも持來て、舟に入たり、行々のみくふ、

追ふは風におはするなり、舟の緣語なり、早守ノ子、貫之以前に土佐守になれる人の子歟、一本に此句なき本あり、千峯何人とも不知、好物よきをくりものなり、

廿九日、大湊に泊れり、醫士、ふりはへて、屠蘇、白散さけ加てもてきたり、志あるに似たり、

ふりはへて源語類聚に能となりとあり、屠蘇も白散も元日に酒にてのむ藥なり、公事根源に此藥の儀式は、弘仁年中にはしまる、一人是をのみぬれは、一家に病なし、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一家に是をのみぬれは、一里病なしといへり、

元日、なほ同し泊なり、白散をあるもの、夜の間とて、舟屋形に挾めりけれは、風に吹なかさせて、海に入れて飲すなりぬ、芋もあらめも、齒固もなし、かうやうの物なき國なり、求めをかす、唯ほし鮎の口をのみそすふ、此吸人人の口を、干鮎、もし思ふやうあらんや、今日は京のみそ思ひやらるゝ、九重の門の、端出の繩のなよしのかしら、ひゝらき等、いかゝとそいひ合る

吹なかさせては吹なびかせて也、芋と海帶と齒固とは、元日に食物なり、齒固とは餅の事也、源氏にもあり、ほし鮎の口をのみそすふとは、右の物ともはなし、たゝ祝の物とて、乾たる鮎の口をすふとなり、くちをすふとは口をつけそめて置く心なるへし、此すふ人々の口を、ほし鮎も思ふやうあらんやとは、口はつけそめてをかる鮎の心に、思ふやうあらんと也、よき風味たらは、かやうにすすめられは、すましき物をと思はんと言心なるへしいつれもたはふれ事と見へたり、下の句の心は、今日は京にてしめをはり、なよしのかしら、ひゝらきなとを門にさす事の儀式、いかゝあらん、さそと思ひやらるゝと言合る也、しりくへ繩は、しめなはなり、日本記にあり

二日、なほ大湊にとまれり、講師、物、酒をこせたり、

講師は上に見へたり、

三日、同し處なり、若、風波のしはしとおしむ心やあらんこゝろもとなん、

風波をおこすは、海波迄も貫之をおしみて、しはしとゝめんためかとの自負也、

四日、風吹は出たゝす、雅貫、酒よき物たゐまつれり、此かうやうの物もて來る人に、なをしもゐあらて、いさゝかわざせさせ物もなし、にきはゝしきやうなれと、まくるこゝちす、

たいまつれりはたてまつれり也、なほしもゐあらていさゝか聊の字也、わさせさせ物もなし、引出物なとやうのしはさもなしとなり、言ふ心は、此樣に音物もて來人にをの〳〵しく、心つよくあひし、しらふ事は、さすかに

ならねとも、さらは又、引出物なとせんと思へとも、夫はなし、かやうにきはゝしき様なれとも、人にしまくると言心なり、一説に曲の字也、心をまけてをると言儀也、

五日、風波やまねは、猶同所にあり、人々、たゆすとふらひにく、

六日、昨日の如、

七日になりぬ、同し湊にあり、今日白馬(アヲムマ)を思へと甲斐なし唯波の白そ見ゆる、かゝる間に、人の家の池と名ある所より、鮎はなくて、鯽よりははしめて、河のみ、海のみ、異物も長櫃に荷ひ續けておこせたり、若菜そ、今日をは知らせたる歌あり、其歌、

白馬の節會を、或は青馬の節會とも申也、其故は馬は陽の獸也、青は春の色なり、是によりて、正月七日に、青馬を覽れは、年中の邪氣をのそくと言本文侍る也、詳に公事根源にあり、人の家の池と名ある所よりとは、池と言所に人の家してあり、それか方よりと言心なり、名あるはなつくると言儀也、鮎はなくて、鮎は祝の物なれとそれをはをくらず、ふなをはじめ、いろ〳〵の物をおくりたり、若菜そ今日をしらせたるとは、其贈物の内に若菜もあり、それにて、さては今日は正月七日若菜の節そと思ひ出すと也、歌あり、をくり物にそへて、歌をもよみておこせたり、淺茅生の野邊にしあれは、水もなき池にみつみつる若菜なりけり、卑下してよめり、我は野草にましはりたる身なれは、池と言名はあれと、水もなき所にて、此若菜をつみて、貫之に送りものにするそとなり、池といふは水あるへき事なるに、それもなき如くなる身そと也、

いとをかしかし、此池と言は、所の名なり、よき人の、男に付てくたりて、住けるなり、此長櫃の物は、皆人、童までにくれたれは、飽みちて、舟子共腹鼓をうちて、海をさへをとろかして、波たてつへし、かくて此間に、事多かり、今日わりこもたせて來たる人、其名なとそや、今思ひてん此人、歌よまんと思ふ心ありてなりけり、とかくいひ〳〵

て、波の立なる事と、うれへ言て詠る歌、

をかし面白なり、よき人はよき女を言、よき女の男につれられて、京より土佐の池と言所に下てすみけるが、此贈物此歌をよみて貫之にをこすとなり、此間に事多かりとは、かくある間に、色々の事もありしと也、今わりこもたせてきたる人、其名なとそや、今思ひ出んとは、此使者になりて、わりこもたせて來る人の、名をなにと言たるそと思ひ出せとも、貫之わすれたれは、其名をしるさぬなり、此人歌よまんと思ふ心ありてなりけり、とかくいひ〳〵て波の立なる事と言てよめる歌とは、此使者歌を貫之か前にてよまんと思ふ心あるに因て、とやかくやいろ〳〵の事を言て、挨拶(アイサツ)にいへるは、波あらたちて、貫之の旅中にうれへなる事よと、それを題の心にて此歌をよむと言義也、

行さきに立白浪の聲よりも後れて泣ん我や勝らん

貫之の行さきに、立白波のあらけなき聲よりも、我か此にをくれて、したひ泣く聲は、猶まさるへしとなり、

とそよめる、最大(イト)聲なるへし、もて來る物よりは歌はいかゝあらん、

歌の批判なり白波より、泣聲のまさらんといへるは、大なる聲にてあらんとなり、持來りしをくり物のいかめしきより、歌はをとりなるへしといへり、

此歌を、是れ彼れ哀れかれとも、獨も返しせす、しつへき人もましれと、是をいたはり、物を飲み食ひて、夜深ぬ、是をいたはりとは、此歌ふてきなる故にいかゝといたはり、ありのまゝにあししともゑいわす、たゝ酒食をのみして夜深たり、

此歌主、またまからすと言て立ぬ、

此歌主もてはやす人なけれは、しらけて言やうは、又重てまいるへし、先ついとま申すとて、座を立つなり、まからすをまからんすとはねてよむへし、

或人の子の童なる、竊に云、麻呂此歌の返しせんと言ふ、貫之か子なり、麻呂は自稱なり、人返しせねは、此子返しせんと言なり、

驚て、最をかしき事かな、よみてんやは、よみつへくは、ゝやいへかれと言ふ、

此をきゝて、貫之をとろきて、をかしき事を言うわらは哉汝チ歌をよみてんと思ふや、誠によみつへく思はゝ、いそきよめ、聞んと言、

まからすとて立ぬる人を、待てよまんとて、求けるを、夜深ぬとにやありけん、やかていにけり、

此子言ふやう、彼まからすと言て立ぬる歌主を待て、それか前にてよまんとて、あなたこなた求れとも、夜深ぬと思ひてや、歌主そのまゝかへりてをらぬなり、いにけりは去(イニ)けり也、

そも〳〵いかゝよみたると、いぶかりて問ふ、此童、さすかに愧(ハチ)ていはす、強て問へは、いへる歌、

貫之、此子に歌はいかゝ詠みたるそと問なり、いふかりは不審するなり、訝の字なり、

行人もとまるも袖の泪川水涯(ミキハ)のみこそぬれまさりけれ

行くも留るも、別れの泪は同し事なれとも、河水は一しを水涯をぬらすとなり、みきわを身の字によせて、行我身はそなたよりは泪まさるとよめり、

となんよめり、かくは言ものか、うつくしけれはにやあらん、いと思はす也、わらはことにてはなにかはせん、をむなをきにしつへし、あしくもあれ、たよりあらはやらんとて置ぬめり、

かくは言ものか、かやうにも善くよみたる物かなと譽る也、うつくしけれはにやあらん、いと思はぬなり、うつくし愛の字を書く、此子を愛する故に、あしき歌をもよしと思ふ也、さはしらねとも、いと思はすとは思の外によくよみたると也、わらはことにてはなにかはせんをとは、童の言歌にては何の難もなしと言心なり、むなをきなにしつへしとは、むなをき空措(ムナヲキ)と書くへし、なにしに此歌をむなしくすてをくへき、あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらは、やらんとて置レぬめりとは、此歌あしくとも、いかにあるとも、童心にやさしき事なれは使につけて、歌主の處へやらんとて、そこに置くと也、

八日、碍(サワル)る事ありて、なを同處なり、今夜月は海にそ入る

是を見て、業平の君の、山の端にけて入れすもあらなん、

と言歌なむをほゆる、若し海邊にてよまゝしかは、浪立さへて入れすもあらなん、とよみてましや、今此歌を思出てある人のよめりける、

業平の歌の事、伊勢物語にある、あかなくにまたきも月のかくるゝか山のはにけていれすもあらなんの歌なり、此は山崎のあなた水無瀬と言處にての歌なれは、こゝに海邊にて、もし此歌をよまは、山の端にけてを海立さへてとよむへしといへり、業平の歌も惟喬の世をたもち給わぬ事を諷してよめる歌なれは、貫之も我身朝にあらすして、田舍なとへ下る心を諷して、かくよまゝしといへるにや、君は業平を稱美していへり、覺るは思ひ出すなり、

照る月の流るゝ見ば天の河出るみなとは海にさりける

此月の出るみなとは、海なれは、流れ去る方も天の河なりといへり、秋水與長天一色と言類にて、月光と海水と接したる體をよめるなり、此類後撰に入たり、さりけるをそ

ありけりとあり總してそありけると言詞をよむには、さありけると、やわつかによむ事、よみくせなるを、傳寫の時、思ひ誤りて、こゝにさありけるに書るにや、覺束なし、

九日、夙(ツトメ)て大湊より、那波の泊を追とて、漕出けり、是彼互に、國の境の内はとて、見送に來る人、數(アマタ)多か中に、藤原の言實、橘の季衡(スヘヒラ)、長谷部の行政等、御館(ミタチ)より出給ひしより、此彼に追ひ來る、此人こそ、志ある人なりける、此人々の深き志は、此海にはをとらさるへし、是より、今は漕離(ハナ)れて行く、是を見送らんとてそ、この人ともは追來(ト)ける、かくてこき行くまに〳〵、海の邊りに留れる人も遠くなりぬ、舟の人も見へすなりぬ、崖(キシ)にも言事有へし、舟にも思ふ事あれと甲斐なし、かゝれと、此歌を獨言にしてやみぬ、

是より今は漕離て行とは、此大湊まて土佐國の境内なれは、浦傳に人々をくりたるか、此よりは海上をこきはなれて、和泉のなたへ渡る事いへり、こき行まに〳〵、漕

行くに隨てと言心なり、まに〳〵は隨字也、をもひやる心は海をわたれとも文しなければ知すやあらん心と言ものは、海をもへたてす、思ふ所へ至る物なれとも文にてそれを言ひやらねは、我心中をなたには知り給わしとなり、文を蹈の字によせたり、海上はふみて通る事ならぬなり、

斯て宇多の松原を行過く、その松の數幾そはく、幾千年せへたりと知す、本ことに波打寄枝ことに鶴そ飛通ふ、面白と見るに、堪すして舟人のよめる歌、

舟人、すなはち貫之、

見渡せは松のうれことに棲む鶴は千世の同志とそ思ふへらなる

うれことは上毎なり、松も鶴も共長壽の物なれは、定て千年のよはひとうしと思はんとなり、見渡はの五文字たゝさらりと一望の心にてはなし、眼にさへきるほとの物を、一々に念頃に見るときの五文字なり、されは、此歌にも松と鶴とをよく見てよめるなり、いつれの歌にも、かやうに心得へし、

とや、此歌は、處を見るにゑまさらす、やくあるを見つゝこき行まに〳〵、山も海も皆暮レ夜深て、西東も見すしてテイケの事、楫取の心に仕せつ、男もならはぬ、最心細しまして女は、船底に首をつき當て、音をのみ泣く、角思へは、舟子楫取は、舟歌うたゐて、何としも思へらぬ、其うたふ歌、

處を見るにゑさらすとは、此松原の風景を見るに、此歌はそれほとゑ言ひをほせねは、處の面白きにはまけたるとなり、卑下也、ていけは天氣也、男もならはぬは最心細し、男子さへ海路になれぬものは心ほそきなり、

春の野にてそ、音をは泣く、我か薄にて、手を剪々摘たる菜を、親や守らん、姑メや食ふらん、歸らや、夜部のうなひ妹か菜、錢乞ん、虛言をして、賒態をして、錢も持て來す、已たに來す、

催馬樂の體なり、うなひ妹は童女なり、うなひ乙女、うなひ松の類なり、賒態物を買ふに、價をやらすしてかゝ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com